

9月9日公演（昼公演）では、神楽衣装について、司会と字幕で解説します。初の神楽衣装の解説です。三番叟、大蛇、手力男之命（タジカラ）の衣装を可能な限りですが、字幕と協同して、わかりやすく司会が語ります。

【三番叟の衣装解説】

- ・三番叟はどの芸能でも大抵同じ装束です。
- ・直垂と呼ばれる装束の表着（うわぎ）には、背中に鶴が翼を広げた絵柄が施されています。
- ・能や歌舞伎では黒地の正絹に金糸を用いた刺繍で描かれているので大変重たいです。
- ・直垂とは上下セットの装束なので、下も黒地に金糸刺繍です。
- ・千早の下には赤い二引半着付（にひきはんきつけ）を着用します。
- ・垣澤社中では身軽さを重要視し、垣澤純子さんの発案で大漁旗の染色技法で作りました。
- ・昔は神楽師が手描きで鶴を描いていたそうです。
- ・しかし垣澤社中では動きやすさを重視しているので、表着は千早（ちはや）と呼んでおり、下は切袴を穿きます。
- ・足袋は以前は白足袋でしたが、他の芸能を取り入れ、最近はウコン足袋を穿いています。
- ・烏帽子は剣先烏帽子（けんさきえぼし）。山頂が剣の先に見えるから。
- ・毛は黒かしきを穿きます。毛は半紙と水引でまとめます。

【大蛇の衣装解説】

- ・鱗文様を必ず用いる。鱗はすべての芸能に共通で、人間ではない邪悪な者、化け物に用います。
- ・表着は半着付のみ。
- ・下はたっつけ袴。地面を這いずるため、大口袴や切袴は穿きません。
- ・足は昔は素足、最近は色足袋を穿いています。
- ・赤か茶の中振毛を穿きます。

【タジカラの衣装解説】

- ・柄ものの手甲脚絆を穿きます。
- ・闇夜の世界を歩いてくるため、草履を履きます。
- ・鎧下と呼ばれる着付けを着用します。
- ・大口袴を着用します。
- ・掛鎧を着用します。お腹には枕と呼ばれるあんこを入れます。
- ・石帯をします。その上から綿の入ったしごき帯をします。

- ・黒の大振毛を用います。その上から鉢巻をします。
- ・烏帽子は唐冠と呼ばれる冠を用います。能では真っ黒ですが、垣澤社中では色鮮やかに描いています。
- ・武力の象徴の矛を用います。岩戸を開ける際には使いません。